

# メディア・リテラシー教育の小学校高学年カリキュラム作成

- 総合的な学習の時間における実践をステップアップし教科等を関連づけたカリキュラムへ -

中村ひとみ\*1 高橋 伸明\*2 笠行 和美\*1 文箭 敏\*1 前田 知之\*1

マスメディアの情報を批判的に分析する力、メディアを活用して効果的に表現する力を育成するために、情報の受け手と送り手を共に体験させる学習を展開した。そしてその成果に基づいて、総合的な学習の時間と教科を関連づけて実施するカリキュラムを作成した。

<キーワード> メディア・リテラシー カリキュラム 情報の分析 情報の制作・発信  
育てたい資質・能力

## 1 研究の動機

現代は「メディアが伝える情報を読み解く」力が必要とされている情報社会である。しかも従来、情報の受け手でしかなかった一般市民が、メディアを効果的に活用し情報の送り手にもなりうる時代である。児童にメディアが伝える情報を注意深く読み解いたり、自らもメディアを活用して情報発信したりする力を育成することは、教育界に課せられた社会的な課題であると考えられる。

## 2 研究の目的

1で述べたような情報社会の要請に応え、児童の「情報を読み解く力」を育てるために、本研究では次のことを明らかにしていきたい。(1)情報の受け手と送り手の立場を共に体験しながら展開していくメディア・リテラシー教育の単元を総合的な学習の時間に位置付け実践していく。その中で明らかになった成果や課題を分析しながら「メディア・リテラシー教育で育てたい資質・能力」を明示する。(2)(1)をふまえて、小学校高学年におけるメディア・リテラシー教育のカリキュラムを作成する。総合的な学習の時間の中でのみ実施するものではなく、学年・発達段階に沿った各教科等の目標や指導内容を考慮し、国語科・社会科等を関連付けた内容となる。

## 3 研究の方法

(1)総合的な学習の時間の中で、マスメディアの情報を意識的に見たり自ら情報発信し

たりするメディア・リテラシー教育を実施し、小学生でも「メディアの情報を構成されたものとして建設的に批判する」基礎的な能力を培うことを試みる。その成果を生かして「情報教育の目標リスト(永野和男氏)」を基にした「メディア・リテラシー教育によって育てたい資質・能力表」を作成する。さらに、小学校における情報教育の中でメディア・リテラシー教育が実施できる根拠やその内容を明示し、実践の普及・定着に寄与していく。

(2)小学校高学年のメディア・リテラシー教育カリキュラムを、総合的な学習の時間や各教科等を関連付けて実施できるような内容を作成する。そして各学校で既存の教育内容を生かしたメディア・リテラシー教育が実践できるようにし、普及・定着に寄与していく。

## 4 研究の実際

本研究の基盤となる総合的な学習の時間における実践を、以下のように実施した。

単元名 マスメディア探検隊(総合的な学習の時間)

実施時期 2001年6月6日～11月16日

対象 笠岡市立金浦小学校 第5, 6学年児童 90名

ねらい

・メディアが伝える情報は制作者の意図で構成されていることが分かる。

(情報の科学的な理解)

・収集した情報の正しさや必要性を判断し、

\*1岡山県笠岡市立金浦小学校(star-eye@mx31.tiki.ne.jp)

\*2岡山県笠岡市立中央小学校(nob-taka@mx1.tiki.ne.jp)

人権を大切にしながら責任をもって情報を発信することができるようになる。

( 情報社会に参画する態度 )

- ・メディアを効果的に活用した学習によって、相手に分かりやすく伝える力や情報を収集分析する力を高めることができる。

( 情報活用の実践力 )

### ( 1 ) 第一次 テレビ観察と学習課題の把握



写真1 カード発想法で視点の明確化

- ・ 1 回目のテレビ観察，感想交流，観察視点の明確化。
- ・ 2 回目のテレビ観察，6 つの視点「映像と音」「カメラワーク」「笑い」「テレビ局」「視聴率」「CM」を導き出す。
- ・ プロジェクト学習「かっこいい視聴者になろう」開始。

### ( 2 ) 第二次 マスメディアの特性理解

制作者の意図によって，マスメディアでは様々な表現技法が使われていることを理解させるために，以下のような活動を行った。

CM分析

教師制作ビデオの分析

「体験！メディアのABC」の視聴

バラエティ番組についてのパネルディスカッション

の活動は以下のように展開された。

ある人気バラエティ番組を自分は「見続けたい」か「もう見たくない」か立場を明らかにしてその理由を説明すると共に，立場の異なる意見に耳を傾け，自分の意見と比較し考えの幅を広げていこうとする活動を行った。

パネルディスカッション前の意見例

<見続けたい>の立場

- ・ 笑いを取るため。仕事だから。視聴者を楽しませるのが目的。

<見たくない>の立場

- ・ おもしろければ何をしてもいいのか。まねをして人を傷つける。

パネルディスカッション後の意見例

<見続けたい>の立場 A 児

- ・ 正しい見方や判断ができる視聴者になるために，パネルディスカッションを通して勉強した。ほかのバラエティ番組を見るときに役立てたい。

<見たくない>の立場 B 児

- ・ 見続けたい方の理由ももっともだ。でも，やっぱりよく見てたら，見る人が少なくなると思う。深く見ていたらいけないところが見えてくるから，...とぼくは思うけど...。でも，かっこいい視聴者になりたいな。



写真2 パネルディスカッションで意見交流

このパネルディスカッションを通して，児童は「番組に対する見方や考え方は人によって違う」という価値観の多様性に気づいた。

### ( 3 ) 第三次 ビデオ作品・Webページの制作と情報発信

ディレクターを中心にグループ作り

児童は情報の受信者・発信者を体験するために番組制作とWebページ制作とを行った。

・ビデオ制作班のテーマ

「私たちの金浦小学校を紹介しよう」

・Webページ班のテーマ

「ビデオ班の活動取材し紹介しよう」

「自分達のメディア・リテラシーの学習を紹介しよう」

基礎を学ぶ

「体験！メディアのABC」の「ビデオの撮影」を視聴し，基本的な操作を学んだ。ま

た「写真と文章」からは、レイアウト・見出し・記事の工夫などについて学んだ。

#### 番組制作



写真3 ビデオ作品制作班の取材風景

- ・伝えたいことを絵コンテに表し撮影。
- ・再撮影、インタビューの取り直し。
- ・Webページ班からの取材を受け、番組制作の意味を問い直す。
- ・作品完成前の「審査会」。
- ・撮り直し・再編集・アフレコ・作品完成。

#### Webページ制作

- ・ビデオ制作班へ取材申し入れ。

#### 取材意図の明確化

- ・今までの学習内容の振り返り。

#### デジタルポートフォリオ作成

伝えたいことが明確に伝わるWebページにするための改良を繰り返し行った。

(<http://nob-taka.press.ne.jp/>)

この間、適宜、自己評価、相互評価、他己評価、Web上で校外からの評価を実施した。



写真4 Webページの編集作業

学習成果を評価するペーパーテストの実施  
この単元で高まった資質や能力を評価するためにペーパーテストを作成し、実施した。

#### ペーパーテストの設問例

- 1) ニュース番組のVTR視聴後

- 1) 番組制作者が伝えたいことは何か。
- 2) そのためにどんなシーンがあったか。
- 3) この番組を見た人はどう思うか。
- 2) 化粧品のコマーシャルフィルム視聴後
- 1) だれに見てもらうために作っているか(性別, 年齢, 職業)。
- 2) 何のために作られたか。
- 3) これを見た人はどう思うか。
- 4) 現実離れしているのはどんなことか。

1)と2)の設問は情報を読み解く力を実践的に評価できるものであり、高い正答率を得た。

#### 5 結論

4に記したような実践研究を経て、以下のような結論を得ることができた。

(1) あらかじめ想定していた「児童に育てたい資質・能力」に評価や修正を加えていき、「メディア・リテラシー教育で育てたい資質・能力」(高学年)(表1)が作成できた。これは、単元構想によって大きく変更を要するものではない。したがって、一定の汎用性をもった基準表にもなり得る。

(2) 国語科・社会科等各教科の目標や指導内容を「メディア・リテラシー教育で育てたい資質や能力」の視点から吟味し、小学校5、6年生の系統を考えた「メディア・リテラシー教育カリキュラム」(表2)を作成した。これによって総合的な学習の時間枠だけでなく、教育課程全般において実施可能となり、メディア・リテラシー教育を普及・定着させていくことができる。

実験的实践であるため、61単位時間という多くの時間を要したが、それだけに児童は様々な体験活動や思考活動を行った。それらを通して児童が身につけた力は、広範でしかも確かなものである。それは、学習成果を評価するペーパーテストの結果にも現れている。

本研究最大の成果は、児童にメディア・リテラシーが身につけてきたことである。また、試行錯誤で新しい研究分野に取り組んだ我々教師自身にもメディア・リテラシーが身につくとき、指導力量の向上にも結び付いた。

こうした研究成果は、現時点では我々研究グループ内の共有財産でしかない。今後はこの研究内容を広く世に問い、議論を重ねて実

実践研究を深めることが、教育界への敷衍を可能にするものとする。本研究の成果がもつ社会的意味は、いっそう高まっていくのである

う。メディアリテラシー教育の実践者・研究者から多くの示唆を頂き、さらに実践研究に取り組んでいきたい。

表1 「メディア・リテラシー教育で育てたい資質・能力」(高学年)

<p>情報の科学的な理解 (映像メディアの表現技法) 映像メディアには、様々な映像・音声の表現技法が使われていることを知る。 制作者は意図して表現技法を使い、映像を構成していることを知る。 (情報と人権) メディアの情報には、人権上問題のある表現を含んでいることを知る。 (メディアの特性) メディアは独自の様式・芸術性・規則などをもっていることを知る。 情報社会に参画する態度 (情報に対する態度) 受け取った情報の正しさや自分にとっての必要性を判断したり、人に与える影響を考えたりして、視聴者としての自分自身の行動に生かすことができる。 収集した情報や友達の発信する情報をもとに、自分が伝えようとする情報を改善できる。 (情報モラル) 自分の発信した情報に責任をもつことができる。 人権を大切にしながら、情報収集・情報発信をすることができる。 情報活用の実践力 (表現) 相手に分かりやすく伝えるために、文字の大きさや色に気をつけて紙資料を作製することができる。 相手に分かりやすく伝えるために、写真・見出し・記事のレイアウトを工夫したり、文字の大きさや色に気をつけたりして、Webページを作製することができる。</p>	<p>制作者の意図を伝えるために、アングル・明るさ・ピンクト・カメラワーク等につけながら撮影したり、必要なカットを選択しながら編集したりして、ビデオ作品を作ることができる。 (メディアによるコミュニケーション) 電話・ファクシミリ・電子掲示板・電子メール等を使って専門家やゲストティーチャーに質問・取材依頼をすることができる。 (問題の発見と計画) テレビ番組の視聴等を通して、疑問に思うことや課題を見つけ、学習の見通しをもつことができる。 テレビ番組等の特性を追究する過程で新たな見方や考え方と出会い、課題を修正したり追究方法を広げたりすることができる。 (情報の収集・分析) 様々な情報機器を使って、自分が必要とする情報を収集することができる。 集めた情報を比較し、制作意図にあった情報を選択することができる。 賢い視聴者を目指した学習を生かして、情報を分析・再構成しながらテレビ番組やWebページを制作することができる。 (発信・伝達) 視聴者・閲覧者を意識して、制作意図を明確にした情報発信をすることができる。 自分たちが作った番組・Webページをネットワーク上に発信することができる。 (適切な情報手段の利用) 目的を達成するために、どんなメディアが使えるかを考える。</p>
--	---

表2 小学校5, 6年生の系統を考えた「メディア・リテラシー教育カリキュラム」

学年	学期	国語	社会	総合的な学習の時間
5	1	「新しいわたし」 ( ) 「依頼の手紙, お礼の手紙」 ( ) 「調べたことを整理して書こう」 ( ) 「わたしたちはこう考える」 ( ) 「読書の楽しさを伝え合おう」 ( )	「あたたかい土地 寒い土地 ビデオレター」 ( )	「CM分析」 ( ) 「ニュース 番組分析」 ( )
	2	「体験したことを分かりやすく伝えよう」 ( ) 「方言と共通語」 ( ) 「地球環境について考えよう」 ( )	「わたしたちのくらしをささえる 情報」 ( )	
	3	「伝え方を選んでニュースを発信しよう」 ( )		
6	1	「命とふれあう」 ( ) 「問い合わせの手紙」 ( ) 「効果を考えて書こう」 ( )		「テレビ って何?」 ( )
	2	「話し合って考えを深め 意見文にまとめよう」 ( ) 「言葉と文化について考えよう」 ( ) 「私の六年間」 ( )	「15年に わたる戦争」 ( )	「ビデオ作品や Webページを作 ろう」 ( )
	3	「伝えたい何かを見つけよう」 ( )		

表中の記載について - 「単元名」(育てたい資質・能力)

主な参考文献 永野和男:「小学校・中学校 総合的な学習の評価の進め方」情報教育編  
総合教育技術3月号増刊, 小学館, P.6 - 30 (2002.3)